



1月のコラム なぜ迅速な支援ができないのか？

2024年波乱の幕開けとなりました。阪神大震災を経験している身としては、この寒空の下どんなにか不安で厳しい生活を強いられているであろう被災地の方々の状況を思うと心が痛みます。1995年当時は、スマホどころか携帯電話さえも個人が持っている人は少なかった時代。IT化もインターネットの普及も発展途上で、一般人はテレビが情報発信の中心で、AIなんて言葉もなかったし、ドローンも実用化されていませんでした。

当時と今とは環境が全く異なるにも関わらず、地震から3日、4日経っても水や食料、そして寒冷地では必須の暖がとれる物資が届けられていない状況がもどかしい。直接死より、支援があれば助かっただろう災害関連死の方が多いとも聞きます。孤立している地域には幹線道路が壊れて近づけないと報道されていますが、なぜ今になってもこうなのでしょう。阪神淡路大震災以降、東日本大震災、熊本地震だけでなく巨大な台風や異常な集中豪雨による大洪水、土砂崩れ…災害列島と言ってもいいほど毎年毎年大きな自然災害に見舞われています。

これらの経験による学びの蓄積があり、備えをする時間も十分あり、情報収集、分析、予測といった技術も当時とは雲泥の差があります。今の技術を持ってすれば、どの地域にどれだけの方が住んでいて、災害時に必要な物資が何処にどれだけ備蓄されているかということ把握し一括管理することは容易なはず。加えてある時点で、災害が起こった時、どの場所から何をどれだけ運ぶのか？どういう運搬ルートや方法が使えるのかなんてことは、データさえインプットしておけば、それこそ簡単にシミュレーションできるでしょう。それとも既に出来ているけれど、例えば自衛隊のヘリが発動するための決済に責任が取れない人ばかりがトップにいるのでしょうか？羽田の事故も影響があったと思いますが、企業ならAプランがダメな場合のBプラン、Cプランも準備していると思うのです。

あれから30年近く経って水がない、食料がない、寒空の下で丸まって寝る状態が続くなんて、命を守ることに對して恐ろしく意識が低く、人命を重視しない政策がとられ続けてきたとしか思えません。蛇口からはいつでも水もお湯も出てきて、お腹いっぱい食べられて、暖かい布団で休める。世界のあちこちで起こってる紛争を見るにつけこんな当たり前が、本当はとても幸せなことなのだと実感します。被災地で救助活動をされている方々にも頭が下がります。でもやはり、国・行政が、どんなことがあっても人の命と生活、最低限の基本的人権が守られることを第一に政策を進めて欲しいし、それを訴えていきたい。

今年の災害・事故はこれで終わり、みんなが健康に平穩に暮らせる年となることを願います。

2024年1月 水田かほる

